

Title	笠信太郎著 花見酒の経済
Sub Title	
Author	大熊, 一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.6 (1962. 6) ,p.614(86)- 615(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19620601-0087
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620601-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が訳出されている。各論文それぞれに持味があつて示唆されることも多いが、何と云つても本書中の白眉は第四論文、すなわち本書編者バイプスのものである。読者はまずこの論文から読むことをおすすめする。

「ロシア・インテリゲンチアの歴史的生成」と題して、バイプスは、インテリゲンチアの生成を、ロシアの西欧化過程と結びつけて理解し、西欧化に二つあることを指摘する。一つは、西欧の文化的生活様式の受容であり、他は批判的哲学的合理主義態度である。前者は政治的選択を強いることはないが、後者は一定の拘束を要求する。そして後者の批判的旧インテリゲンチアは、現状の悪の原因をすべて資本主義のせいにしていたのだが、今日では、その悪が産業生活に固有のものであることが明らかになってきた。資本主義・社会主義・共産主義のいかんを問わず、工業化は一律に著しい類似性を持ち、ソ連ではすべてを犠牲にしてひたむきに産業の成長に集中してきたことから、一切の害悪をますます熾烈化することになったのだ。そこで批判的旧

インテリゲンチアは戦間的から次第に逃避的な新インテリゲンチアになり、哲学的には共鳴できなくとも文化生活としては近代技術の発展にしたがうために自主・自律を求めるようになる。このことが全体主義傾向の中に自主的領域を拡げ、批判的インテリゲンチアの残存を可能にしていける。その点でこの体制は深刻な矛盾をはらみ、一九五六年以後のイデオロギーの動揺はその現われとみることでできようといふバイプスは断じている。

その他、「ドクトル・ジバゴ」の英訳者へイワードは、エレンブルグを政治に敏感な追随者とし、だからこそ、彼の小説「雪解け」はソ連知識人の動向を示しているのだと指摘している。ソルスベリー「フルシチョフのソ連」と併読すればソ連作家の圧力がひたひたと感じられよう。またカリフォルニア大学マリア教授は、インテリゲンチアという奇妙なロシア語は、「疎外された知識人」以外の何ものでもないことを明快に分析している。ロシア語インテリゲンチアを好んで使う日本の知識人は、疎外されていることをみずから知っているのでもあろうか。などなど尽きせぬ話

題を提供してくれる。(時事通信社・昭和三七年三月刊・新書版・二〇〇頁・一〇〇円)

—加藤 寛—

笠 信太郎著 『花見酒の経済』

結局は自分のあたまでしか物はんがえられないというけれど、自分のあたまでかんがえるというところは、意外にむずかしい。たいしては既成の觀念に合わせたり、いわゆる世間並みの判断でごまかしてしまふことが多い。笠さんの本は、「もの見かた・考え方」以来、案外うっかりして気がつかないでいたことを、私たちに思い出していただく。気がつかなかったというのは知らなかったのではない。他人の目で見たり、他人のあたまでかんがえていたからそうだったのであろう。

この本の主な中味は、すでに新聞紙上でたいていの人が読んで感心したものにはない。土地が投機の対象であり、土地のキアピタル・ゲインが信用膨脹の起爆の役をはたし

ている(第一章)、というのがいちばんあたらしい問題提起だ。日本の過当競争(第二章)ということも、笠さんによって、あらためてそうかとおもひ知らされたことだった。キアピタル・ゲインが物価騰貴をひきおこすことなら、だれでも知っている。過当競争とは独占的競争のことであつて、「供給がふえるほど価格が上がる」という過剰能力説につながるものであることは、経済理論をすこしよけいに勉強した者なら、これも知っていることだ。だから、現実になつた経済理論がないというのではない。正しい理論を選択できないでいたのである。

しかし、それには現実に対するすぐれた直覚が必要である。そして、すぐれた直覚は現実に対する、ある種の平衡感覚をもつことである。経済のなかにノーマルでどこがアブノーマルかを判断する基準のようなものが、あたまのなかになければならない。自分でかんがえるということは、まずこうした感覚を身につけていざできることなのだろう。いいわるいはべつとして、笠さんのものにはそうした感覚がにじみでている。ガルブレイスの

「ゆたかな社会」は、読者側が当然知るべくしてあまりにも知らなすぎたと痛感したから、センセイショナルになつたのであるが、これもガルブレイス教授の感覚の問題につながるのだろう。両方ともジャーナリストに縁があつたことは興味ふかい。

ただし、笠さんは日本生まれの経済学出ですよと説いておられるが、笠さんの平衡感覚を信用するかぎり、中山経済学や有沢経済学は、現われぬほうがよろしいのである。

(朝日新聞社・四六判・二〇八頁・二〇〇円)

—大熊 一郎—

* * *

E・H・カー著 清水幾太郎訳 『歴史とは何か』

本書は英国の現代史の大家である著者が、一九六一年の一月から三月にかけてケンブリッジ大学において行った連続講演の記録である。著者はその中で現代史の専門家にふさわしく「歴史とは何か」という本質的な問題を

極めて現代的問題意識と結びつけて説明している。「歴史は現在と過去との対話である。」

この言葉は本書において繰り返される著者の基本思想の一つである。そこには一方において過去の歴史をたえず現在という我々にとつて最も確実な地点から考察するという極めて主体的な、かつリアリスティックな立場が示されている。と同時に他方では我々のよつて立つ現在には、決して固定された、我々にとつて受動的なものではなく、逆にたえず未来に向つて開かれた地点であるが故に、そこにはひかえめではあるが「人間の可能性の漸次的発展」に対する信仰がもたれているのである。このことを著者自身「歴史とは過去と現在との間の対話である」と前の講演で申し上げたのですが、むしろ歴史とは過去の諸事件と次第に現われて来る未来の諸目的との間の対話と呼ぶべきであつたかと思ひます」と表現している。この意味で本書は単に歴史を研究するものにとつただけでなく、現在に生きるものすべてにとつて極めて重要な示唆を与えてくれる。我々は著者の基本思想の中に、良い意味でのイギリスの自由主義歴史学の伝統